別府の社会構成

とみきたかし

一地域の産業構造の性格あるいはその発達の様相をしめすメルクマールとして、人口・戸数の増減、労働人口の移動を考えることも出来、またとくに各種の産業（職業）に従事する人口の割合・変化も考えられる。

封建社会であつた時代にはまだ農業と家内的手工業とが生産の中心であり、したがつて井路・灌漑や新田開発の規模だとか、牛馬の所有数、商業的農産物、さらには株仲間・問屋等の内容などがバロメーターとなり得た。故戸谷敏之氏によつて、江戸時代の農業経営の類型を西南型と東北型とに大別する七つのメルクマールがあげられる。

(1) 技術の高低
(2) 労働集約の度合
(3) 貨幣経済の深浅
(4) 身分関係
(5) 家族形態の大小
(6) 土地配分の状態
(7) 年貢の軽重

がこれである。そしてその後、農民的商品生産化と領主権力との絡みあいにおいて、東北・西南の二地帯のほかに畿内先進地帯が設けられるようになつた。この中で、西南日本型は楮・櫨を中心とした商品生産はかなり高度化しながら、それが藩の専売機構たる「藩国会所」に吸収されて、かえつて農民層の窮乏と分化がすすんだものである。わが大分県においては、ことに土地所有の零細化と並んで、米・菜種・干鰯さらに紙や七島藺などの各種農工産物の商品化・専売化が指摘される。これらの伝統・残滓が今だに各地域の特性として指摘されることは、資本主義生産のすすんだ現在としてあまりにほめられたことではない。

江戸時代に十五の諸小藩に分立していた歴史的事情が各地に小中心地をつくり、それが次才に大分市を中心として統合されてゆく過程――そこに大分県勢の統一的発展が見られるのである。

このような状況の中で、別府市のみは特殊な状勢をしめす。それは云うまでもなく「湯ノ町」としての観光・商業都市の実態に他ならぬ。

オーストラリヤの国民経済学者コーリン・クラークは、経

済発展の段階を次のようにのべている。労仂賃金の増加・労仂力の才一次部門（農業と鉱業）から、才二次部門（製造業）へ、最後に才三次部門（商業・運輸業・銀行・奢侈）にいたる移行である。このような経済発展図式の中に、産業構造の差異をはつきりと見とることが出来るのである。

別府市が現在、才三次部門の中でも、観光・商業によつて構造的に性格ずけられていることが、はたしてこの場合に最高次の発展段階にあると云い得るのであるかどうか。

県内主要都市の簡単な産業比較図を作成して考察をすすめてみよう。

産業人口比較表(%)　昭25

産業別／地域	農業	製造業	卸小売業	サービス業	公務
県全体	57	9	8	8	3
大分市	23	18	16	13	9
別府市	14	10	21	24	9
中津市	31	22	15	10	4
日田市	40	20	12	10	4
佐伯市	36	12	12	10	4
臼杵市	32	20	12	10	4
津久見市	38	15	7	7.5	2

産業人口の比較（%）を図および表によつてしめした所によると、別府市の産業構造の特色が判然する。

県政の中心たる大分市の隣接であることは公務員数が大分と同数をしめ、九%の高きにおよんでいるが、明治二十年代に早くも別大電車の敷設が見られたこととも関係があろうし、温泉の湧出とも深い因縁があろうか。

しかしその他の点では、県内の諸他市がそれなりに共通点を見せるのに対して、別府市のみはかなりの相違をしめす。製造業の比率が小さく、逆に卸小売業の比率がはるかに高度であること、さらにサービス業の比率では群をぬいて格段の高率をしめしている。

これらの点について全国各地の温泉観光都市がいかなる産業構造をしめすものであるのか、調査時日の余裕をもたない為めに判断・論評するを得ないけれども、それにしてもサービス業・卸小売業が、全産業人口の半ばに達していることは異とするに足るのではないのだろうか、これが各種のソシアル・テンション――病理的現象を生み出す原因であることは今茲にふれるまでもあるまい。

これと逆に農業人口の比率がわずかに十四%にすぎぬことも少しく奇異の感がある。才二種兼業の受配農家が多い故でもあろうか。速見郡を中心とする後背地との関係が究明されねばなるまい。

それにしても、観光都市たる別府市の「煙草」売渡代金が意外に少ない（大分市を僅に上廻る程度である）のは、これまた如何なる理由によるのであろうか。

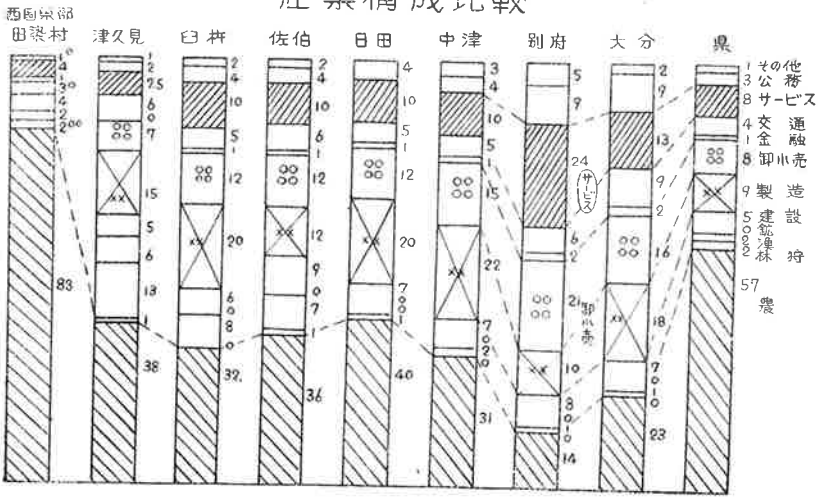
タバコ売渡代金

県	1,809,256,000円 (1.019.654.000本)
大分市	215,381,000円
別府市	233,126,000
中津市	91,733,000
日田市	73,051,000
佐伯市	75.496,000
臼杵市	50,945,000

	才一次産業人口	才二次産業人口	才三次産業人口
大分県	62.5%	14.2%	23.3%
大分市	25.1	25.0	49.9
別府市	16.2	18.6	65.2
中津市	30.1	31.9	38.0
日田市	41.3	27.2	31.5
佐伯市	45.2	22.0	32.8
臼杵市	40.3	25.9	33.8

以上の概況をさらに適確に明示するために、さきに記したコーリン・クラークによる才一次・二次・三次部門別による全体的な産業構成を比較してみると右の如くになる。

中津市才二次部門三一・九%、別府市才三次部門六五・二%が、異彩を放つていることに気がつく。才一次・才二次部門の%低位とともに、県下諸都市と比較して別府市の都市としての特殊性を見ることが出来るのである。

次に、このような産業構造が、戦前と比較して、如何様に変化して来たか、戦後としてどのように推移して来たか、これらの動態的把握について、県内各郡市別に七ないし九つの類型を設定して、その特性を明らかにして行く予定であつたが、身体的事情によつて、作業および執筆するゆとりを持たぬため、擱筆させていただき度いと思う。

産業構成比較